
CAGE - 箇の中の記憶探偵 -

白城海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CAGE -籠の中の記憶探偵-

【NNコード】

N5490Z

【作者名】

白城海

【あらすじ】

「何を言つてるか分からぬと思うが俺にも分からぬ

『電車を待っていたら突然ホームから突き落とされた』

馬鹿な友人、イカれた後輩と過ごす『日常』に突然現れた『非日常』俺には、命を狙われるような『理由』も『富』も『特殊能力』も『秘密』も何もない。

必死に訴えても話を聞いてくれない警察、大人たち。

そして激しさを増す襲撃。ついに、大切な友人までもが巻き込まれ、傷つく。

血に染まつた友人を見て、俺は決意する。

「犯人をこの手で捕まえる」と。

自称高校生探偵、邪鬼眼持ちの後輩、甘ったれの妹、クールなお嬢様。

一癖も二癖もあるヒロイン達と、『見えない犯人』の織りなす学園バトル・ミステリ。開幕！

序 犯人の独白

『力が欲しい』

あなたは、そう思つた事はある?
他人には無い、自分だけの『特別な力』。
誰にも踏み込ませず、誰にも汚されることのない、無敵で、最強
で、醜悪で、最高に美しい力。

私は、持つている。
生まれついて、持つている。

この力があれば、どんな物でも手に入る。何だってできる。
富も、羨望も、嫉妬も、敬意も、畏怖も、暴力でさえも、望めば
簡単に手に入る。

私には、不可能はない。私は全能なの。
何でもできる。何だってできる。

例えば 人を『殺させる事』も。
例えば 殺人罪を、他人になすりつけることさえも。

私には出来る。私に不可能はない。

この物語は『狩り』の物語。

私の『罪』の証拠を握ってしまった男の物語。

愚かで、哀れで、何も持たず、戦う術も知らない哀れな男が

全てを持つ私に破滅させられる物語。

そこにはドラマもミステリも何も必要ない。ただの処刑劇場。
だって、私は全能なのだから。無敵なのだから。全てを持つているのだから。

私は手を下さない。私は何も知らない。私は罪を負わない。
彼を殺すのは、私の《手足》。

忠実で、従順で、律儀で、約束を違えない、最高の《手足》。

籠の中の小鳥に逃げ道はない。

そう、あまみけいじ《天海慶次》

あなたには、死んでもうつ。

1・日常の終わり

ふわり、と。宙に舞う感触がした。

「えつ？」

午後六時半。ラッシュを迎えた駅のホーム。
俺はそこにいた。いたはずだった。

なのに、どうして

どうして、俺は宙に浮いているのだ。

どうして、目の前に電車が迫つて来ているのだ。

俺の瞳に映るのは、鋼鉄の処刑具。

いや、処刑具なんて生易しいものではない。
眩いライト。

がたがたと車輪とレールの擦れる音。

高速で襲い来る巨大な鉄塊。

電車。

数秒も待たずに俺は地面へと落ちるだろ？。

そして、次の瞬間に五体は寸断され、臓器と脳漿を飛び散らし、
物言わぬ肉塊になるに違いない。

死ぬ。俺が、死ぬ。

視界が灰色へと変わる。

世界がスローモーションに見える。

今まで生きてきた中の『記憶』がフラッシュバックする。

穏やかだった幼い頃。

優しい兄、甘えん坊の妹。

多忙ながらも愛情を注いでくれた両親。

突然終わった穏やかな日々。

鼻をつく消毒液の香り。白い部屋。ベッド。病室。

交通事故に遭つたと聞かされた事。

『記憶障害』を負つてしまつた事。

もう、一度と穏やかな日々は戻つて来ない事。

穏やかな日々は終わつてしまつたが、騒がしい日常が始まる。『障害』を負つてもなお付き合いを続けてくれる気のいい友人。変わり者の後輩。

学校へ行き、他愛のない話をし、笑い、楽器を演奏する日々。

そして今、全てが終わりを迎えるようにしている。

どうして、俺だけ。どうして、俺ばかり。

神様とやらがいるなら、心の底から憎悪をぶつけやりたい。

ゆっくりとゆっくりと進んでいく世界の中、俺の胸にはただ、怒りが燃えていた。

- - - - -

『見えない敵と命の危機』

六月十八日 午後零時四十分（六時間前）

私立平坂高校 中庭

「甘いわね慶次！探偵から逃げられると思つたの？」

昼休みの中庭に、やたらと良く通る声が響いた。

俺は驚かない。もう慣れだ。

こんな事を言う生徒は一人しかいない。

食べかけのパンを無理矢理牛乳で流し込み、声の方を見る。視線を向けた先には、予想通りの女。

中肉中背。化粧氣の無い顔立ち。猫を思わせる特徴的な瞳。外側に跳ねたセミロングの黒髪。

人前では認めたくない友人、風間祈衣かさまきいだ。

思わずため息が漏れる。

「うるさい。エセ探偵。俺の孤独のグルメを邪魔するな。放つておいてくれ」

風間は探偵を自称する変人だ。

事実、学校内の話題に関しては探偵の名に恥じない程の情報収集能力を持っている。

俺から言わせてもらえば探偵と言つよりはゴシップ記事かワイドショーのようなものだが。

ちなみに、一応幼馴染らしい。正直、認めたくない。

「グルメって…コンビニのクロッケパンじゃない。栄養偏るわよ?」

「そうだよ。天海先輩。よければ僕がお弁当を作るけど?」

突然聞こえた後ろからの声。

振り向くとこちらも見慣れた顔。

音楽部の後輩、黒川絢葉。

俺に一目惚れしたと言い、突然入部した妙な少女だ。

小柄で色白。眼鏡の下に輝く、硝子のように透き通ったブラウンの瞳。光の加減によつてはアツシユブロンドにさえ見えてしまうほどに纖維の細い髪の毛。まるで職人の魂が込められたフランス人形のような少女。

黙つていれば目を見張る美少女なのだが、性格に大きく問題があるのが難点。

具体的に何が問題かと言えば、《付き纏つてくる》。《気づけば俺の背後にいる》。

まるでストーカーか忍者。

悪意も被害もないのが逆にタチが悪いと言える。

「…つたく」

静かな昼食を邪魔した友人たちに向かい、頭を抱え、文句を言つ。

「メシくらい静かに食わせてくれよ。あと、黒川。お前はせめて食えるモノを作つてから弁当つて単語を発しろ。頼むから」

「それはまるで、僕が料理が出来ないみたいじやないか」

「事実だろ。この前持つてきた、《調理実習で作つたクッキー》が

ただの炭だった事、忘れてないだろうな

「ううつ」

急所を突かれ、黒川が黙る。

その姿を見て嘆息する俺。今日は一人になりたくて隠れていたのに台無しだった。

そもそも、どうやって俺を探し当てたと言つのだろう。

俺達の通う平坂高校は、生徒数三千人の大型校。人間ひと一人探すのも簡単ではないはずだ。

「つたく。ストーカーかお前らは

「これが探偵の力よ」

黙れ自称探偵。俺はお前を探偵と認めない。

世界中の誰もがお前を探偵と認めようと俺だけは認めるものか。
「違うよ。先輩たちは探偵じゃなくて、秘められた《能力》チカラに覺醒する《決意の騎士》なんだから」

そして黒川は高校生なんだから、中一病は卒業しなさい。ビニの邪鬼眼使いだ。お前は。

「つてか、何の用だよ」

これ以上こいつらのノリに付き合つていては昼休みが終わつてしまふ。

無駄話を切り上げ、話を聞く事にする。

「いや、特に用は無いんだけど」

「天海先輩ウォッチング？」

無いのかよ。そしてウォッチングって何だ。俺は鳥か獸か何かか？何なんだよお前ら。

「だつたら一人してくれ」

迷惑な友人たちとの騒がしいやり取り。これが俺の日常。いつもなら馬鹿騒ぎに加わつてゐる所だが、今日は勝手が違つた。昨日の夜からの出来事を思い返すと、とてもじやないが笑う氣分にはなれない。

あまりにも《色々と起きすぎている》のだ。

「悪い。ちょっと疲れてるんだよ」

「疲れてるから来たのよ。その顔、何かあつたでしょ？」

「僕たちに隠し事は無駄だよ、先輩」

「うつ…」

今度は、俺が黙る番。

変人だが、鋭い。どうやら心配せてしまつていたようだ。
妙に気恥ずかしい気持ちになつてしまつ。

「一人で抱え込んで仕方ないじゃない。一体どうしたの」「どうしたって言われても、俺にも分からないんだよ」
観念して、『色々と起きすぎている』事を語る事にする。
恐らく、黙つていれば余計に不安にさせただけだ。
お人好しの友人たちとは、俺が何も言わずに抱え込んでいれば自分で動き出すことだろう。
例え、それが原因でトラブルに巻き込まれると分かつていたとしても、だ。

本当に、昨夜から訳の分からない事ばかりだつた。
昨夜、俺は強盗に襲われた。

コンビニへ行く途中、人気のない河川敷で覆面をした複数人の男に囲まれ、刃物で脅されたのだ。
幸い、上手く逃げる事に成功し怪我もなく金品も奪われなかつたのだが

「じゃあ良かつたじゃない。怪我が無いなら何よりよ」

「先輩は警察に行つたの?」

「行つたけど、『パトロールを強化します』で終わりだつた。どうも、被害が無いと警察つてのは動かないらしい」

「そうね。数日、警戒の強化は続くかもだけど、いるかいないか分からない強盗に人員は回せないもん」

風間の言つ通りだ。強盗未遂より解決しなければいけない事件は世の中に山ほどある。

誰も傷つける事ができず、何も奪う事が出来なかつた間抜けな強

盗の為に割く労力は多くはないだろ。

「どううな。俺だってそう思つ。登校中は警笛が多かったし、俺も不満はないぞ。だけど」

それだけではなかつたのだ。

強盗たちを撒き、警察に通報し、交番で聴取。

疲れきつて帰宅する途中に、《それ》はやつてきた。

住宅街の狭い路地。

突然、目を焼くヘッドライト。

一方通行を猛スピードで逆走するバイク。

いたずらなのか、殺意があつたのか、それともただの暴走車なのかは分からぬ。

ただ一つ確実なのは、避けることができなかつたら死んでいた事。一瞬でも飛ぶのが遅れていたら、俺はここに立つていないと言う事。

「それ、本当?」

信じられない、と言つた表情の風間。

田を見開き、手を口に当てる。

「嘘を言つてどうするんだよ。マジで死ぬかと思つたんだ」

思い出すだけで体が震えそうになる。

凶暴なエンジン音、タイヤが地面を擦る音、獲物を狙う獣の瞳のよつなヘッドライト。

闇の中のため犯人の顔も見えず、ナンバープレートも確認する前に逃げられてしまった。

「これは事件の予感ね。今度こそあたしの…高校生探偵の出番よつ。

一週間前の《死体遺棄事件》のリベンジをしてみせるわ」

「僕も手伝うよ。天海先輩を傷つけるなんて、ゆるせない。僕の黒魔法で呪つてやるんだから」

「茶化すなよ。そもそも事件つて決まつた訳じゃないだろ」

何故か抱きついてきた黒川の腕を振りほどきながら諭す。

そもそも、俺の命が狙われる理由が無い。

殺されるような恨みを買った記憶はないし、金を持つてる訳でも無い。

何かとてつもない秘密を知つている訳でも無ければ、隠された《能力》なんて馬鹿馬鹿しい物も存在しない。

命を狙われていると考えるくらいなら、宝くじが当たるくらいの確率を引いたと考える方がまだ自然だった。

「本当にそう思つてる?」

俺の心の中を見透かしたかのように風間が問いかける。

彼女は顔を上げ、俺の目をじっと見据えていた。

「風間先輩の言う通りだよ。天海先輩の《記憶障害》なら、知らない間に命を狙われていくてもおかしくないんだから」

《記憶障害》。八か月前の交通事故で負つてしまつた頭の傷があつた場所をさする。

既に表面上の傷は完全に消えているが、俺の《頭の中》には消えない《障害》が残つている。

日常生活を送る事に不便はあるが、どうしようもないと言つほどではないのが救いかもしれない。

それに、例え障害が残つっていても、この迷惑な友人たちと送る騒がしい日常があれば不満はない。心からそう思つ。

…とてもじゃないが面と向かつて本人たちには言えないが。

「とにかく一回、ちゃんと調べてみよう。何かわかるかもしね
！」

黒川が言葉を言い終える事は出来なかつた。

「 つ！」

影がかすめた。

直後、何かが割れる音。

日常が赤く染まつた。

手にしていた牛乳パックを取り落してしまうほど^{トント}の衝撃。

信じられない光景。

俺達はたつた今、中庭でお喋りをしていただけの筈だ。

ほんの数秒前まで、黒川は俺に抱きついて笑顔を見せていた筈だ。

なのに、何故 。

『何故黒川は血まみれになつて蹲つているんだ』。
『何故俺の制服は黒川の血で赤く染まつているんだ』。

俺の足元には碎けた硝子製の植木鉢。

周囲に散らばるのは、砕け、飛び散った硝子片。

そして、植えられていたガーベラの花。

赤い花弁が鮮血で上塗りされ、赤黒い輝きを放つてゐる。

数秒前を思い返す。

俺の鼻先をかすめていつた影。

一瞬の風圧。

そして、ガラスが碎ける音。

間違いない。

『この植木鉢は上から降ってきた』

「誰だッ！？」

上を向き叫ぶ。

だが

俺の叫びに答える者は、何処にもいない。

耳に入るのは、騒ぎを聞きつけて集まつた野次馬が放つ雜音。
そして、黒川絢葉の痛みに呻く悲痛な声だけだった。

1・日常の終わり（後書き）

事件編、開始。

初見の方でもわかるように書いていくつもり。
コンゴトモヨロシク

2・走馬灯 現実

頭が真っ白になつたのは一瞬だけだった。

呆然としてる場合か。
違うだろ？。

頭の芯から、俺の心の一一番奥から、俺が俺である為の部分が囁く。目の前で大切な友人が蹲つてて、血を流してて、苦痛の呻きを上げてて。

ならば、俺がする事は一つしか無いじゃないか、と。

「風間。救急車だつ」

「…う、うん！」

立ち尽くす風間の背中を叩き、指示を出す。
血なら嫌と言つほど見慣れてて。ほとんどは俺が巻き込まれたケンカによるものだが。

そして、俺の兄は大学病院で医師の仕事をしてて。

幸運な事に、俺は兄から応急処置の知識も教わつてた。

大丈夫。俺なら できる。

風間が携帯電話を取り出すのを確認し、黒川の傷の具合を見る。
左肘の内側。大きな血管が通る場所が、横にぱっくりと裂けていた。傷口からはどうぐどくと止めどなく血液が流れ出でてる。これほどの出血は今までに見た事が無かつた。

「だけど、大丈夫だ。このくらいなら

自分の腰のベルトに手を伸ばし、外す。

運がいい事に、今日は皮では無く布ベルト。布ならば《きつく縛

る事が出来る》。

人間は体重の一割の血液を失えば体調に支障をきたし、三割で生命の危機に陥ると言つ。

本当に危険な出血は、心臓の鼓動に合わせて噴水のよう噴出す出血だ。

黒川の怪我はそこまで深刻ではない。もちろん放置すれば危険には違いないが。

服に血がつくことなど気にせず、ベルトで左脇を縛る。
間接圧迫止血。左腕に行く血液の量を減らし、出血を抑える。
後は傷口を覆う事が出来ればいいのだが…。

周囲を見渡す。

生憎、知り合いの顔は無い。当然だ。俺はダブリの三年。
しかも《事故》のせいで人付き合いを極力控えているのだから。
田に入る時は遠巻きに見ている興味本位の野次馬ばかり。役に立つとは思えない。

俺自身の無力さに歯噛みする。だが
「に、兄さん。どうしたんですか！？」

偶然だった。

妹 天海美鳥みどりが近づいてくる。

目を見開き、驚いた表情。長い黒髪を揺らす姿は怯える小動物のようだ。

「ちょうどいい。清潔なタオルを持つてないか？」

確かに、美鳥の午後の授業は水泳。妹なら持っている可能性がある
と思い、問うが

「すみません。タオル…教室です」

「…だよな」

当然の答え。常に鞄を持ち歩いている訳がない。当たり前の事に
考えが及ばない。動搖している。

「クソツ…おいつ、誰かタオルは持っていないかっ！清潔な奴だつ

！」

野次馬に向か、叫ぶ。祈りを、願いを、思いを込めた叫び。だが、野次馬はお互いの目を合わせるだけで答えは返つてこない。ふざけている。じうかしている。

「返事くらいしろよっ！女の子が血まみれなんだぞ！？」先ほどまでの溢れるような出血ではないが、黒川の腕からは未だにじくじくと血が流れている。

ただでさえ白い顔は、病的なまでに青白く染まり瞳は涙で潤んでいる。

「何でだよ…。どうして無関係でいられるんだよ！」

怪我人の前で苛立ちを見せる事は良くない事だと聞いてはいたが、俺にはどうしても感情を抑える事が出来なかつた。

このまま保健室に連れていくか？と自問。

答えは、NO。保健室まで百数十メートル。

血を垂れ流す黒川を歩かせたくない。

動けば血管の活動が活発になり、出血が増える。

それでも、このまま放置するわけにはいかない。

「クソつたれ！クロ、ちょっと待つてろ。すぐにタオル取つてくるから！」

黒川は無傷の右手で俺の制服のベストを力なく掴んでいる。

不安なのだろう、痛みが。恐ろしいのだろう、生まれて初めての出血量が。

制服を掴む手を優しく引きはがし、立ちあがつたその瞬間、

「どけつ！有象無象の役立たずども」

凛とした女の声が校舎の隙間に響き渡つた。

気高く鳴り響く声は、まるで夜闇を切り裂く稲妻。

独善的と言えるほどに強く、逆らう事を許さないほどに鋭い。

声に込められた感情は《怒り》。他人に無関心な野次馬に、見て

いるだけの役立たず達に向けられた怒りだ。

声の出所は後ろから。

振り返っている場合では無い。そんな暇はない。

なのに、俺は見てしまった。

『彼女』の声に宿る余りの強さに、怒りに引き寄せられるよう。元通りに割かれている。

「！」

野次馬の壁が、まるでモーゼの逸話のよひに割かれている。その中心に『彼女』はいた。

まず目に入つたのは純白のタオル。俺が今、何よりも求めている

物。

タオルを掲げた長身の女生徒がそこに立っていた。長い長い金髪をはためかせ、青い瞳で真っ直ぐに俺を見つめている。

気高く、美しいその姿は、雪山にたつた一匹残された白狼。

一瞬　ほんの一瞬ではあるが状況を忘れ、見とれてしまった。

「これを使いなさい。清潔さは保障するわ」

女生徒が俺のもとに歩み寄り、タオルを手渡す。

「助かるつ

タオルを受け取り、黒川の腕にあてがい、きつく押される。赤黒いシミが真っ白なタオルをどんどん漫食していく。

黒川の傷は大きく、深い。恐らく何針も縫うことだろう。

それでも命には別状はないはず。俺の見立てが間違つていなければ、だが。

「はい。それじゃあ大急ぎでお願いしますね。はい」

風間を見ると、ちょうど電話を切つた所だった。

同時に、沈黙していた美鳥がはつ、と顔を上げる。

「あ、あの…。私、先生呼んできます！」

「頼んだ。先に保健室な？その後職員室にも行つてくれ。保健室に

誰もいなかつたら体育教官室だ」

「はいっ。任せてください」

さすが俺の妹。立ちすくんでいたのは十数秒。

すぐに正気を取り戻し『できること』を行動に移す。

家では甘ったれの妹だが、実は生徒会役員に選ばれるほどしっかり者なのだ。

「救急車。十分かからないって」

「サンキュー。聞いたか? 黒川^{くろかわ}、もうすぐ救急車が来るからな。もう

大丈夫だ。待つてろよ」

「ありがとう…。天海先輩は…凄いね」

「…クロ?」

今にも消え入りそうな声。

力の無い、すぐにも散ってしまうような音色。

「本当に…カツコいいよ…最期に、君の顔を見れて…良かつ…た」

「黒川ちゃん?」

「ねえ。もし、生まれ変わったら…」

震える右手を俺に差し出し、懇願する。

「僕を恋人にして…くれるかな?」

俺が握り返そうとした瞬間。

黒川の腕が力を失い、落ちた。

「おい…」

瞳を閉じ、眠る様な表情^{かお}。

見よぎによつては笑顔にさえ見える表情^{かお}。

何故。

何故だ。

どうして、どうしてこんな事になるんだ。

どうして

『死んだフリをするんだ』。

「瞼、ピクピク動いてんぞ」

「う、バレた？」

「バレないわけが無い。」

確かにかなりの出血量ではあるが、あの程度の出血で人間は死なない。

昔、安っぽい刑事ドラマを見ていた時に兄が言っていたので間違いないはずだ。

「マジで命に別状無いんだぞ。まあ、貧血くらいは起こすかもしないけどな。病院に行くまでに出ていく血なんて、多めの献血程度だぞ」

ちなみに、ペットボトルに換算すると五百ミリボトル一本弱。洒落では済まない量だつたりするのだが、黙つておく事にする。

「ちえつ。死んだら惚れてくれるかなーって思つて」

「どう言つ思考回路だよソレは…。死んだら恋愛も何も無いだろ」

「そう、だね。じゃあ生きる事にするよ」

「つたぐ、このバカ。口を開けば変な事ばっか言いやがつて。もう大人しくしてろよ」

空いた手で軽く頭を小突ぐ。

緊迫した状況だと言うのに、思わず和み、笑いが漏れてしまった。

これだけ馬鹿な事が言えるなら大丈夫だ。

風間も胸をなでおろしている。

ようやく一息つけそうだった。

嘆息し、後ろを振り返る。もちろんタオルを押さえつける手は離さない。

「ありがとう。《睦さん》…だよな？」

タオルを持ってくれた女生徒に礼を言つ。

「私の事を知つていいの？話した事はないはずなのだわ」
知らないわけが無い。

隣のクラス A組の生徒、睦紅兎。

まるでテレビや雑誌のモデルのようなすらりとした長身。彫りの深い美貌。腰まで届く美しい金髪。

同じ人間とは思えないほどに完璧にバランスのとれた顔のパーツ。《信じられない》と言う言葉でも足りないほどの美女。

知らない方がおかしい程の有名人なのだ。

ロシアの血を多く引いているらしく、長期休みのほとんどを海外で過ごしているらしい。

「隣のクラスだしな。タオル、汚してごめんな。新しいの用意しておくからさ」

「気にしなくていいのだわ。私は当然の事をしたまでかしら」

《だわ》、《かしら》どこか使い方に違和感を感じる語尾。日本に来たのが高校入学の時らしいので、ある意味仕方ないのかかもしれない。

「気にするさ。睦さんが来なければ取り返しのつかない事になつたかもしだから。本当に、ありがとな」

「ふふんっ。そこまで言つなら、その感謝。受け取つておくわ」笑顔を向け、精一杯の礼。何故か顔を赤くする睦さん。

彼女は《当然の事》をしたと言つた。

少し複雑な気分だ。

周囲を見渡す。興味の色を帯びた視線が俺達に向かっている。

「…」

怒りで胸が張り裂けそうになる。

周囲の野次馬に、友人を護れなかつた自分の無力さに、そして。植木鉢を落とした犯人に。

『犯人』

一つ、嫌な『想像』が頭を巡った。
当たつて欲しくない考えだつた。
杞憂であつて欲しい。嘘であつてほしい。
もし、俺の『想像』が眞実だつた場合、
俺のせいで、
天海慶次のせいだ。

彼女は、腕にずっと残る傷を負つてしまつたという事なのだから。

嫌な『想像』

それは

世界が、反転した。

真昼の空から夕暮れへ。

野次馬が遠巻きに囲む中庭から、人混みで埋まつた駅のホームへ。

頭が混乱している。

俺は今まで学校にいたはずだ。

黒川が大怪我をし、救急車を待つていてる途中だつたはずだ。

違う！

頭の中から声が聞こえる。

違う。違う。違う、と。

朦朧とする意識の中、自分の状況を確認する。

尻もちをついた俺。がくがくと震える体。何故か制服の前ボタン
が外れ、Tシャツが露出していた。

視界の端に映るのは、怯えたような瞳で俺を見る群衆。ほとんど
が平坂高校の生徒。

そうだ。思い出した。

俺がいるのは学校では無い。駅だ。駅のホームだ。

『俺は駅のホームから突き落とされたのだ。』

おぞましい感覚。後ろからの衝撃。今でも背後に残っている。

徐々に頭がはつきりとしてきた。途端に疑問が頭の中を支配する。
当然の疑問。

『ならばどうして俺は生きているのだろう』、と。

俺はホームから線路に突き落とされた。

そして、目の前と言つても良い距離に電車が迫つていた。
なのに、何故生きている。何故挽肉(ミンチ)になつていない。どうして内
臓も脳漿も、ぶちまけずに『無傷』なのだ。

ふと、襟首に違和感を感じる。

これは、手。手の感触。人の手だ。

誰かが俺の襟を握りしめているのだ。

違和感を確かめるため、震える体を制し振り返る。

「に…兄さん…」

「ケージ…！」

俺を見つめる一対の瞳。涙を滲ませた一人の女。小動物のような妹、そして活発そうな女。

「助けて、くれたのか？」

「ぐり、と頷く二人。

奇跡としか言いようが無かつた。

恐らく、俺が突き飛ばされた瞬間に一人が手を伸ばし、引き戻してくれたのだ。

買い換えたばかりの制服のボタンははじけ飛んでしまったが、命と比べれば安いものだった。

「あ、ありがとう」

声はいまだに震えている。頭も、完全にははつきりしていない。体は凍りつく様に冷え、反対に心臓は全力疾走をした後のようにぐぐぐくと高なっている。

自分の息遣いさえ聞こえるほどに身体の感覚は研ぎ澄まされているのに、頭は現実とは違う場所をゆらゆらと漂つている。

奇妙な感覚。思考が纏まらない。霧がかかったようにぼんやりとしている。

だがそれでも、たつた一つ、たつた一つだけ確実な事がある。

俺の腰の下に残る感覚が教えてくれている。

俺の体に、心に刻み込まれた恐怖が教えてくれている。

間違いない。

俺は、間違いなく

《命を狙われている》

3・大人の対応

六月十八日 午後七時二十分 — 『平坂高校』駅 駅員室

映像の中の男は疲れているように見えた。

平坂高校の制服を纏つた長身。丁寧に整えられた黒髪。

不鮮明な映像のせいで細かい顔立ちは分からぬが、映像の男は紛う事なく俺 天海慶次だつた。

疲れているように見えるのも無理はない。

あのときの俺はボロボロだつたのだ。肉体的にも、精神的にも。何も喋る気が起きなかつた。口を開く気力さえなかつた。

当然だ。後輩の大怪我に加え、命を狙われているかも知れない恐怖。

全ての出来事が俺の肉体を、精神を蝕んでした。

肩を落とし、うなだれている俺。両隣りには妹の美鳥と、もう一人の俺を助けてくれた女生徒。

しばらく、映像は何事もない駅のホームを映し出す。

まるで働きアリのように蠢き、列をなし、散る人の群れ。

ほとんどは帰路につく平坂高校の生徒だが、会社員らしき男女や、大学生らしき若者、他校の生徒も交じつてゐる。

映像の中の俺は動かない。魂の無い抜け殻のように電車を待ち、佇んでいる。

だが、数秒後。

突如、人混みが蠢いた。

次の瞬間、映像の中の俺がバランスを崩し、つんのめる。

口をぽかんと開けた間抜け面をしていったことだろう。

たらを踏み、黄色い線の外側へ、そして吸い込まれるように何もない空中へ方足を踏み出す。

がくん、と沈む右半身。

駅の外まで響き渡る、けたたましいブレー キ音。

確かに、あの時俺は『死』を覚悟した。

だが、次の瞬間。

俺の背に伸びる一つの腕。

冥界行きの穴から引きずり出される体。

ブレー キをかけながら通過していく特急電車。

驚き、後ろに下がる周囲の生徒。

密集したいせいか将棋倒しのように尻もちをつく者もいた。

目まぐるしく回りに回る状況。

だがそれは、わずか一瞬の出来事だったのだ。

「どう考へても押されてるだろ！？」

映像が流されていたモニターを指差し、俺が叫ぶ。

『事件』の後、俺が通されたのは駅員室とも呼ぶべき場所。教室の半分ほどの広さの部屋。

いつもはカウンター越しにしか見えない内側。

電子機器の唸るような駆動音が、外のざわめきと混じり雑音となる。

不快な雑音は俺の耳を突き、いらだちと怒りに拍車をかける。目に映るのはいくつかの作業机、パソコン、資料棚、そして壁一面に広がるモニター。

そして、三人の大人。

一人は『鉄道警察隊』と書かれた紫の腕章をつけた若い警察官。もう一人は、中年の駅員だ。妹たち二人は、何故か別室に通され

て行つた。

「押されたつて言つけどねえ…」

歯切れの悪い口調で駅員の一人が呟く。

「俺は押されたんだよ！間違いない。嘘なんか言つてないんだ！」

今でも覚えている。俺の体に与えられた衝撃を。

一つの、『手』の感触を。

あれは『事故』なんかではない。間違いなく、『故意』なんだ。

「嘘とは言つてない。うん。君は嘘をついてない。ただ、ねえ」「まるで泣きじゃくる幼児を諭す親の様な口調。察しの悪い俺でも分かる。

この顔は『どうやって目の前のパーティクに陥つた高校生を落ち着かせようかと言葉を選んでいる』と考えている。

「うーん。何て言えばいいのかなあ。そのね、えーっと」「

□□もる駅員。彼の様子を見て、警官が割つて入る。

「よくあるんだ。混雜してるときにさ。人がギュウギュウ詰めだらう？それで押される。で、押された人は思う。『突き落とされた！』と

感情を排した警官の言葉。

頭が真っ白になつた。

警官の言葉の意味が一瞬、分からなかつた。無意味な言葉の羅列にしか感じられなかつた。

次に、真っ白になつた頭が真っ赤に燃えあがつた。理不尽に対する怒りで、不条理に対する疑問で。

警官の言葉の意味を理解した。無意味な言葉の羅列が意味をなし、連結した。

つまり、警官たちはこう言いたいのだ。

『お前が押されたと思つてるのは勘違いでしか無い』と。

「つざけんな！俺は、俺は押されたんだよ！今でもあのクソみたい
な手の感触が残つてんだよ！」

感情のブレーキを失い、口汚い言葉が思わず吐きだされる。
テープルに身を乗り出し、警官の顔が近づく。

それでも、警官は無表情。

「だからね。なんていうかね。気にしそぎつて言うの？」

俺の激高を諫めるかのように駅員が続ける。だが、田を合わせようともしていない。

俺は駅員を睨みつける。無理矢理に田を合わせる。

突き落とされたなんて信じじるつもりは無いと言つ意思表示。

「人が密集しているせいでのビデオには押された姿は映つていない。
確かに君の言う事も分かる。だが、よく見るんだ」

警官がダイヤル型のコンソールを操作し、映像を撒き戻す。

「ここ。君が『突き飛ばされる』前のシーンだ」

ダイヤルを回すのをやめ、再生ボタンを押す。

『六番乗り場』と記憶している電車の乗り場。

何故か、普段は整列しているはずの、行列のバランスが崩れてい
た。

「分かるかい？『列のバランスが崩れて』いるんだよ。不幸な事故
だつたんだ」

「…そんな馬鹿な」

「証言だつて取れている。残つている生徒さん達に話を聞いたけど、
君が突き落とされたように見えたって言つ子はいなかつたよ。全員
が揃いも揃つて、『誰かがぶつかってきてバランスが崩れてしまつ
た』と発言している」

再び、コンソールをいじる警官。

映し出されたのは先ほどとは別のカメラからの映像。

携帯電話を耳に当て、人混みから離れようとする平坂高校の男子生徒が走っている。

恐らく、少しでも通話がしやすい場所に移動しようとしているのだろう。

かなりのスピードだ。全力疾走と言つても良い。人混みを避け、搔き分け、がむしゃらに走る。

だが、そこには帰宅ラッシュで賑わう駅のホーム。走っている男子生徒が六番乗り場の行列に並んでいる生徒にぶつかってしまう。

それをきっかけに綺麗に整列した行列は、分裂し混沌となる。

「この言つ事だよ。分かつたかな？押した子にも、走っている子にも悪気はなかつたんだ」

相変わらずの無表情で警官が告げる。

「《原因》になつた男子生徒には厳しく注意させてもらつた。自分が何をやつたのか理解して反省していた。それでも君は不満か？《不幸な偶然》だつたんだよ」

熱に犯された頭が一気に冷める。誰も、俺の話を聞いてくれない。誰も、信じてはくれない。

ぶつかった男の話は事故と信じるのに、俺の話は信じない。俺を押した人間の言葉は信じるのに、俺の言葉は信じない。冷め、沈む意識。押し寄せる失望感。

「だけど、その《不幸な偶然》が、もつ《四度目》なんだよ…」ビデオを見る前の聞き取りで、既に警官には説明してあった。暴漢に襲われ、轢き逃げに遭いそうになり、植木鉢が落とされ、ホームから突き飛ばされた。

一つ一つは不運な事故だ。だが、丸一日の間にこのような《偶然》が起こる訳がない。

確かに警官や駅員の理屈も理解できる。

カメラには明らかに偶然の事故の証拠を映し、証言と書いつ裏付け

も取れている。

だけど、けど、それでも

「これだけ偶然が続けば必然としか思えないんだよ…。後輩だつてケガしてんだ…！」この事はどうやって、どうやってあんたらはどうやって説明するんだ！？」

膝の上で拳を握りしめ、訴える。

睨みつけるように、怒りを、嘆きを、全てを込めて声を絞り出す。

「うーん。確かにね、そうだよね」

しばしの思案の後、駅員の一人が漏らす。

「なあ、立花さん。被害届、書かせてあげたらどうです？」

今まで一言も喋らなかつた駅員が口を開く。

思ひが通じたのだろうか。

信じて、もらえたのだろうか。

年長者一人の言葉に、困った顔をする立花と呼ばれた警官。困った表情。かお無表情だった警官が初めて見せた表情だった。どうしてそこまで渋るか俺には全く理解できない。それでも、俺にとつては大きな前進だつた。

「じゃあ、被害届書こいつか」

警官が鞄から『被害届』と書かれた紙を取り出す。

「ちゃんと聞くから、はつきりと答えるように

睨むような目で警官。頷く俺。

これで警察に調べてもらい、犯人を捕まえてもらえる。

もう、恐れなくて大丈夫なのだ。

だが、何故か俺の胸には不安が渦巻いていた。

直後、不安は的中する。

俺は現代の司法システムの欠陥を知ることになる。

悪夢の始まり。

最低な数分間の幕開けだった。

3・大人の対応（後書き）

次回、最低な裁定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5490z/>

CAGE -籠の中の記憶探偵-

2011年12月26日22時57分発行